

雑司が谷研究10

まちづくり NPO が運営する雑司が谷プレーパーク活動 の特徴と公共空間利用の変化

Zoshigaya Study 10

Characteristics of Zoshigaya Play-park operated by the NPO Machizukuri
and its effect on changes in the usage of public space

原 わかな* 薬 袋 奈美子**
Wakana HARA Namiko MINAI

要 約 若いファミリー世代の増加が著しい雑司が谷地域において、新住民の地域コミュニティへの参加は課題であり、雑司が谷プレーパークはそのきっかけの大切な場となっている。本稿は雑司が谷プレーパークの立ち上げの経緯を明らかにすることを通して、まちづくり NPO によるプレーパーク活動の特徴と、プレーパーク活動が地域の公共空間の使い方に及ぼす影響について考察することを目的とする。まちづくり NPO の多様な人材のネットワーク、フラットな組織体制と相互の助け合い、まちづくり専門家の参加、多様性を前提としたインナーコミュニケーションといった特徴が有用されたことで、プレーパーク活動が短期間で安定的運用に至ったと考えられる。また、プレーパークに絡めた防災かまどの設置や防災訓練の実施、子ども遊びの危険発見と迅速な対応といった、公園の使い方へも影響を与えた。

Abstract Younger families have recently increased markedly in Zoshigaya, and participation in the local community by new residents is an issue there. Zoshigaya Play-park provides an opportunity for new residents to participate in the community. The aim of this paper was to discuss characteristics of this play-park operated by the NPO Machizukuri and its effect on changes in usage of public space. This paper describes events leading to the founding of the Zoshigaya Play-park. The Play-park succeeded in the short term due to the characteristics of Machizukuri NPO. The NPO is a network of diverse members, it has a flat structure, and members provide mutual support. Members of the group communicate with one another, and that communication is predicated on the participation of Machizukuri experts and diversity. In addition, the Play-park has affected the usage of public parks. Residents conducted a disaster prevention drill using the newly installed Kamado benches (which double as grills in an emergency) and can quickly identify and respond to risky play by children.

1. はじめに

近年雑司が谷はマンションやミニ開発の増加に

より、若いファミリー世代が増加している。雑司が谷一〜三丁目の9歳以下の人口の変化を Fig.1 に示す。平成21年、26年、31年の三時点と比較すると9歳以下、特に4歳以下の増加が著しい。既成市街地における、いわゆる新住民の地域コミュニティへの参加は、他地域と同様に雑司が谷においても課題であり、町内会への入会率が減少し、地域のまちづくり協議会会員も町会長など旧住民が多くを占めて

* 人間生活学研究科生活環境学専攻
Graduate School of Human Life Science, Division of Living Environment

** 家政学部居住学科
Department of Housing and Architecture

いるのが現状である。一方で、新住民の参加への障壁が低い場も存在する。ひとつは毎年10月に開催される雑司が谷鬼子母神御会式大祭である。その成り立ちから日蓮宗信者に限らず参加者を受け入れており、新たに講社を立ち上げて参加することも可能で、新住民と地域コミュニティの接点となっていることは、細野ら¹⁾の研究により明らかになっている。もう一つは雑司が谷プレーパーク活動である。プレーパークは小さな子どもを持つファミリーが主な参加者となり、且つ年間を通した活動のため、新住民が地域コミュニティに入るきっかけとして大切な場になっている。

1978年の羽根木プレーパークから始まり、現在に至るまで全国においてプレーパーク^{注1)}活動は広がりを見せており、400を超える団体の運営が確認されている^{注2)}。日本冒険遊び場づくり協会がプレーパークで大切にしていることのひとつに「子どもの生活圏にあること」^{注3)}を挙げていることから、プレーパークは地域に密着したコミュニティ活動となることは必然といえよう。プレーパークの運営主体の構成をTable 1に示す。「主たる活動として冒険遊び場づくりを行う市民活動グループ」が59.6%と最も多いが、本稿で研究対象とする雑司が谷プレーパークは、まちづくりNPOが主催しており、運営主体として14.9%と次に多い「冒険遊び場を主としない市民活動グループ」に該当する^{注4)}。本稿は、雑司が谷プレーパークの立ち上げの経緯を明らかにすることを通して、まちづくりNPOによるプレーパーク活動の特徴を明らかにすること、更にプレーパーク活動が地域の公共空間の使い方に関与する影響について把握することを目的とする。筆者も会員の一人として参加しているまちづくりNPO理事会の会議内容及び議事録、毎月のプレーパーク通信の情報整理を行い、また、雑司が谷ひろばくらぶの副理事でありプレーパーク活動のリーダーと、まちづくりNPO法人にボランティアで参加しているまちづくりコンサルタント両名へのヒアリングを実施した。

2. 既往研究

プレーパークに関する研究は多く行われている。全国のプレーパーク活動団体の実態を継続的に調べている梶木による研究^{2) 3)}、プレーパークの利用実態を把握した神谷ら⁴⁾、森賀ら⁵⁾、梶木ら⁶⁾による研究、プレーパークの運営形態に主眼をおいた朴⁷⁾、梶

木⁸⁾、嶽山ら⁹⁾、濱本ら¹⁰⁾の研究があるが、これらは「主たる活動として冒険遊び場づくりを行う市民活動グループ」によるプレーパークを対象としているものが大半である。一方で本研究は、「地域まちづくりNPO組織の一活動として存在するプレーパーク」を対象としていること、また筆者がNPO組織の一会員として観察参加をしてきたことにより、プレーパークの立ち上げから安定的運営までの詳細の経緯、及び関係者の心情まで踏み込んで考察していること、プレーパーク活動と公共空間の使い方の関係にも焦点を当てていることが特徴である。

3. 雑司が谷プレーパークの実態

3.1 雑司が谷プレーパークの運営主体

雑司が谷プレーパークは、まちづくりNPO法人「雑司が谷ひろばくらぶ(以下ひろばくらぶ)」の一活動である。ひろばくらぶは、東京都豊島区雑司が谷を拠点としており、「高田小学校跡地の公園と施設を地域のコミュニティや防災の拠点として活用し、そこに集う人々を中心となって、地域のまちづくりをさらに活性化することを目的に活動」しており^{注5)}、2020年3月に開園する新設公園の指定管理者を目指して現在活動している。雑司が谷で20年近くまちづくりに取り組んでいる雑司が谷・南池袋まちづくりの会と、高田小学校跡地の公園検討を行っている「公園計画検討会」が主な母体であり、現在約20名の会員が在籍し、雑司が谷在任歴、性別、年齢が多様な会員によって構成されている。ひろばくらぶの活動をTable 2に示す。四つの活動分野があり、「みどり」は公園緑地の維持活動に加え(Photo 1)、地域にある荒れたちょっとした空き地を清掃して壁等に絵を描き、ベンチや植木などを設置することにより、まちかどの休憩コーナーをつくる活動をしている(Photo 2)。「あんぜん」は小中学生の見守りパトロール隊による活動、安心安全や景観にかかるまち点検会の継続的实施と、落書き消しなども行なっている。「あそび」は本研究対象であるプレーパーク活動であり、「まなび」は地域の歴史や文化を大切にするための活動で、地域のまち並みに貢献している前庭を表彰する前庭コンクールや、まち歩きをして地域の資源を探してまちづくりの芽を育てるといった様々な活動をしている^{注6)}。

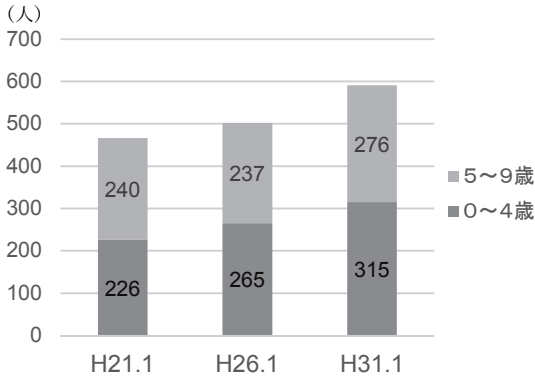


Fig.1 Population of children age 9 and under in blocks 1, 2, and 3 of Zoshigaya

出典：住民基本台帳による年齢別人口
<http://www.city.toshima.lg.jp/070/kuse/gaiyo/jinko/023949.html>

Table 1 Group operating the Play-park

運営主体	N=188
主たる活動として冒険遊び場づくりを行う市民活動グループ	59.6%
冒険遊び場を主としない市民活動グループ	14.9%
行政・自治体	2.1%
企業などの民間事業者	2.1%
その他（NPO 法人、指定管理者、公園管理者、大学、実行委員会形式など）	21.3%

出典：特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会 第 7 回 冒険遊び場づくり活動団体
 実態調査 調査期間 2016 年 11~1 月

Table 2 Activities operated by Zoshigaya Hiroba Club

活動分野	事業名	事業内容(活動)
みどり	地区内の公園緑地の保全維持管理活動	雑司が谷中央児童遊園のボランティア清掃・花壇づくり
あんぜん	地域の安心・安全活動	落書き消し
		安心安全景観等にかかるまち点検会
		小中学生見守りパトロール
あそび	子ども育成活動	近隣の子供たち向けの公園遊び会の開催＝プレーパーク
まなび	歴史と文化を育む活動	前庭コンクール まち歩き勉強会



Photo 1



Photo 2

3.2 雑司が谷プレーパークの活動概要

雑司が谷プレーパークは、毎月第三日曜日の 10 時半から 14 時半まで、豊島区の公園で開催している (Photo 3, 4)。子どもが自ら考えてやりたいことを思いっきりやれる場、そして大人にもものびのびとした気持ちで子どもを見守りながら、大人同士の交流も促す場となることを目指している^{注7)}。プレーリーダーは不在で、常時 3、4 名のスタッフにより運営している。そのうちの一人は雑司が谷ひろばくらぶ副理事でありプレーパークのリーダー A 氏、他は子ども遊びのボランティア活動を続けている P 氏、過去にプレーパーク運営をやっていた Q 氏とその友人の R 氏と、地域外から参加するボランティアスタッフで構成されている。

プレーパークへのこれまでの参加人数を Fig.2 に示す。参加人数は子どもと大人を含み、参加者の出入りも含めた凡そのべ人数となっている。2017 年 11 月の豊島区主催の出張プレーパークを除くと、2018 年までの参加人数は 20~50 人で推移していたが、2019 年に入ってから 50~70 人程度と、二年目に入って参加人数が増加している。現在会場とし



Photo 3



Photo 4

て使用している公園の規模及びスタッフ人員よりこれ以上の増加は運営上難しいため、現在の参加人数は妥当といえ、順調な運営が続いている。

4. 雑司が谷プレーパーク設立経緯

雑司が谷プレーパークの立ち上げから、安定的開催に至るまでの経緯を Table 3 に示す。活動内容と各種手続き、広報活動、雑司が谷ひろばくらぶの関わりについて、それぞれ以下に記す。

4.1 活動と各種手続きの経緯

2017年10月に、A氏の知人、友人に声をかけた小規模な公園遊び「子どもあそびばプロジェクト Vol.1」を行い30名が参加した。この公園遊びは東京プレイデー^{注8)}実施日の10月1日だったため、46か所ある(2017年時点)東京プレイデーのサテライト会場として登録された。11月には豊島区主催、NPO法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク(以後 WAKUWAKU)運営による、出張プレーパーク「子どもあそびばプロジェクト Vol.2」を、廃校となった旧高田小学校校庭にて開催し、その準備のために、A氏、WAKUWAKU、豊島区子ども課で、校庭の下見、打ち合わせを実施して計画を練った。当日は約200人の参加者があり、大盛況であった。校庭を使用できたため、段ボール遊びがのびのびとでき、廃校と

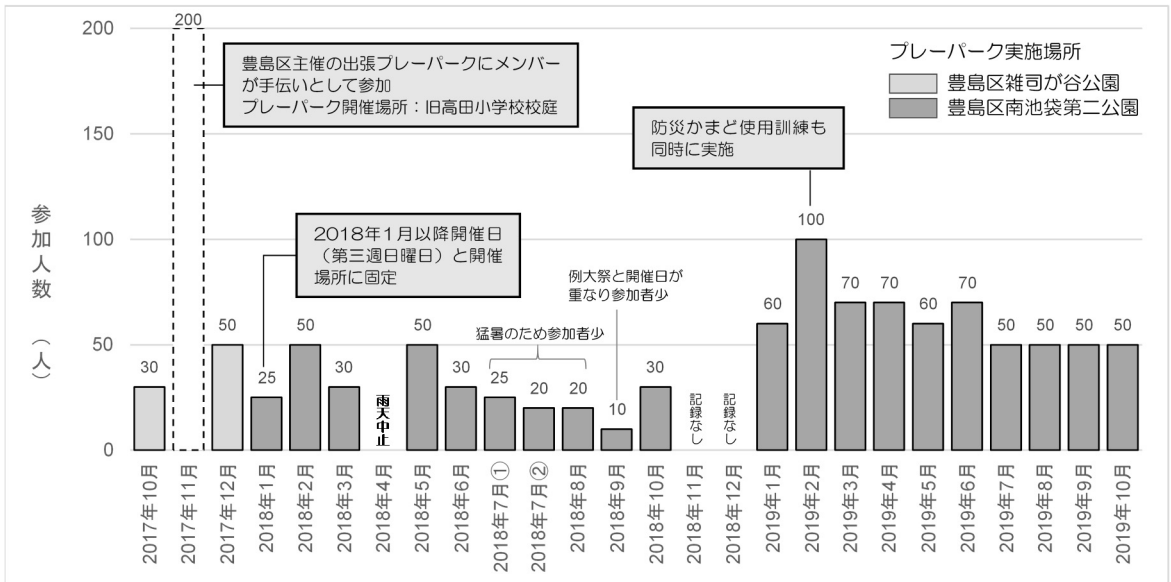


Fig.2 Number of attendees to the Zoshigaya Play-park

Table 3 Events leading to the founding of the Zoshigaya Play-park

年	月	活動	各種手続き	広報活動	雑司が谷ひろばくらの関わり	
2016	7				A 氏、高田小跡地公園検討会にてプレーパーク実施を提案	
	7				A 氏、再度プレーパーク実施をひろばくらふ準備組織へ提案	
2017	9				NPO 法人設立へ向けた活動の実績づくりのひとつとして「子供育成活動」が決定	
	10	小規模の公園遊び（こどもあそびばプロジェクト Vol.1）を実施。東京プレイヤーのサテライト会場に認定される 豊島 wakuwaku ネットワーク、豊島区子ども課と出張プレーパーク会場を見下見、打ち合わせ		打ち合わせ議事録をメンバーに展開		
	11	出張プレーパーク（こどもあそびばプロジェクト Vol.2）を開催（主催：豊島区、運営：NPO 豊島 wakuwaku ネットワーク）		豊島区主導でチラシ等配布 毎月のプレーパーク通信をひろばくらふメンバーへ配信が始まる	出張プレーパークにひろばくらぶ会員 5 名、日本女子大学生 6 名が出張プレーパークに手伝いとして参加 ひろばくらぶ副理事として A 氏が就任	
	12	雑司が谷ひろばくらぶ主催プレーパーク（こどもあそびばプロジェクト Vol.2）、1 回/月実施開始。 他地域のボランティア P、S 氏による支援		保育園等知り合いのついででメーリングリストにお知らせ		
	1	雑司が谷プレーパークに名称を変更。 開催日程の固定（第三日曜日） 他地域のボランティア 3 名の定期的な支援が始まる		広報活動の必要性を認識		
2018	2				NPO 法人雑司が谷ひろばくらぶが正式に設立	
	4		豊島区の後援を獲得			
	5	公園の高い擁壁の上を歩く子どもを確認し、豊島区公園緑地課へ連絡		チラシ配布（小学校 2 校・保育園置きチラシ、町内掲示板） A 氏、としま会議にて雑司が谷プレーパークについてのスピーチを実施	会員によるチラシ配布	
	6			チラシ配布（小学校 3 校での配布、保育園置きチラシ、町会掲示板）	会員によるチラシ配布	
	7	（猛暑のため参加者が少ない）	公園占用許可取得→水栓の使用が可能になる	A 氏、アシスとしまキックオフイベント（区主催）にてプレーパークを紹介する A 氏、セーフコミュニティ会合に NPO 代表として参加		
	8	（お盆休み中のため開催参加者少）				
	9	（大鳥神社例大祭と重なり参加者少）				
	10			チラシ配布（小学校 2 校 1-2 年生、保育園置きチラシ、町会掲示板）	会員によるチラシ配布	
	11	各回でテーマを設けることにし、11 月は木の実を使った工作				
	2019	1	テーマ：竹とんぼ		チラシ配布（小学校 2 校 1-3 年生、保育園置きチラシ、町会掲示板）	会員によるチラシ配布
		2	プレーパークの火器使用のため、近隣（30 戸）を挨拶周り 防災かまどを使用したプレーパーク テーマ：火 防災かまどの使用訓練の実施	火器使用許可取得 保険への加入を始める	火の使用をアピールしたチラシを作成し配布（小学校 2 校 1-3 年生、保育園置きチラシ、町会掲示板）	会員によるチラシ配布 火器使用に伴う周辺住民への挨拶周りに、会員 2 名が協力 防災かまどを使用したプレーパークに会員 6 名、日本女子大学生 3 名が協力
3		公園内町内会倉庫の使用が可能になる（区議が公園緑地課に打診）		NPO 法人 日本冒険遊び場づくり協会の遊び場マップに掲載される		
4			公園占用許可と火器使用許可取得 子どもゆめ基金の申請が通り、助成金を取得	チラシ配布		
5		テーマ：こおろぎ、かいこ観察				
6		テーマ：たけとんぼ、そうめん（かまどベンチで煮炊き）				
8		テーマ：川下りの水路づくり				

なるため原状復帰にそこまで神経質になる必要がなかったため、絵具やチョークなどのお絵描きも思いっきりでき、参加者からとても好評であった。翌月12月から、正式に雑司が谷ひろばくらぶ主催⁹⁾のプレーパーク「子どもあそびばプロジェクト Vol. 3」を開始し、同時に月一回の頻度で開始することを正式に決定した。12月のプレーパークには、11月の出張プレーパーク時にお手伝いとして参加していたP氏、S氏が応援に駆け付けた。P氏は近隣小学校の学童サポートをしており、S氏も子どもの遊び場づくりの経験が豊富であり、遊びのきっかけづくりへの多大なる支援をした。

2018年1月から、プレーパークの名前を「雑司が谷プレーパーク」へと変更し、開催も第三日曜日に固定した。引き続きP氏、新たにQ氏、R氏がボランティアとして参加し、遊びのきっかけづくりの支援をした。この3名はこの後もほぼ毎回助っ人として参加することとなる。4月には豊島区の後援を獲得した。2018年の夏は猛暑だったこと、お盆休みと重なったこと、また9月は大鳥神社の例大祭と同日だったため、参加者が少なかった。一方7月には公園占有許可を取得できたことにより、水栓を使用した水遊びが可能になり、暑い夏の外遊びには大きな前進となった。

2019年2月には、兼ねてから切望していた火器使用許可を取得したことで、初めて火を使ったプレーパークが開催された。会場としている公園には当初かまどベンチがなかったが、豊島区子ども課、公園緑地課の支援によりかまどベンチが設置され、プレーパークと同時に住民が防災かまどを使用する機会にもなった。周囲を住宅で囲まれた公園のため、近隣の約30住戸に、プレーパークでの火器使用のお知らせと挨拶を行った。また、2月から保険にも加入し、怪我や事故への対応体制を整え、3月には公園内の町内会倉庫にプレーパークで使用する荷物を置かせてもらえるようにもなった。プレーパークでの遊びが広がる中で、道具類が増えて置き場所に困っており、区議会議員に相談していた案件であった。また、4月には年間の公園占有許可及び火器使用許可を取得したことにより、遊びの選択肢が広がり、プレーパークの安定的開催への体制を築いた。更に令和元年の子どもゆめ基金¹⁰⁾の申請が通り助成金を獲得したことで、ボランティアスタッフへの支払いなども可能となった。

プレーパークを実施する中で、公園の危険箇所に気づくこともあった。2018年5月のプレーパーク開催時に、子どもがフェンスを伝って高い擁壁の上を歩く姿を確認し、落ちると致命傷の危険がある懸念があるため、急遽その場で対応すると共に、豊島区公園緑地課へ連絡し、恒久的な対応へと至った。

4.2 プレーパーク活動のコミュニケーション

雑司が谷のプレーパーク活動のコミュニケーションは、ひろばくらぶ会員向けと会員以外の外向けの二つに分類される。外向けのうち、プレーパーク開催のお知らせについては、雑司が谷ひろばくらぶ主催のプレーパークが始まった当初、保育園、父親によって構成されるおやじの会や知り合いの伝手を使ってメール配信、及びFacebookなどで行っていた。2017年12月は約50名の参加者があつが、翌月には約25名しか来なかったという状況を目の当たりにし、より広範囲に告知する必要性を認識し、2018年5月からチラシの作成を開始した。チラシは基本的に二か月分の作成とし、近隣小学校への配布、保育園への置きチラシ、町内会掲示板への掲示を行なった。2018年11月から毎回のプレーパークのテーマとなる活動を決め、チラシでも告知するようになった。また、対外的に、プレーパーク活動自体を地域に広く知ってもらうためのコミュニケーション活動も実施してきた。2018年5月にA氏は「としま会議¹¹⁾」にて雑司が谷プレーパークについてのスピーチを行った。主催者代表とA氏は他イベントで面識があったため、ゲストとして呼ばれたという経緯であった。また、同7月には豊島区子ども若者総合相談「アシスとしま¹²⁾」キックオフイベントにおいて、雑司が谷プレーパークを中心に、ひろばくらぶについてのパネル展示を実施し、同じく7月に、A氏は豊島区セーフコミュニティの会合にもひろばくらぶ代表として参加した。豊島区主催のイベントや会議への参加は豊島区子ども課からA氏への声かけによるものであった。

一方でひろばくらぶ会員向けには、2017年11月の出張プレーパーク計画時の打ち合わせ議事録から始まり、毎月のプレーパーク通信をA氏はほぼ毎回配信している。プレーパーク通信は、遊びの内容やそれらの写真、気になったこと、次回へ向けての課題等についてA4一枚程度にまとめられている。ひろばくらぶの定例会議は約月一回あり、その場で口

頭による報告で済ます活動が多い中、報告内容を可視化し、継続的に発信している。

4.3 プレーパーク活動へのひろばくらぶの関わり

雑司が谷プレーパークは、2017年7月にA氏がひろばくらぶの準備組織にプレーパーク活動を提案したことから始まった。8月にはNPO法人設立へ向けた主活動のひとつとして「子ども育成活動」が決定し、手段としてプレーパークを実施することとなった。11月の豊島区主催の出張プレーパーク誘致開催には、ひろばくらぶの会員5名が手伝いとして参加し、プレーパークを実際に体験したことで、プレーパークへの理解と共感を持つこととなった。その勢いもあり、同月に行われたひろばくらぶ準備組織定例会議において、NPO組織として体制を決める中、A氏の副理事長就任が満場一致で決定した。2018年2月にひろばくらぶはNPO法人として登記申請が完了し、正式に設立した。2018年5月からチラシ作成を始め、配布は小学校や保育園と繋がりがある会員が協力して行った。2019年2月の火を使ったプレーパーク開催へ向けては、コンサルタントや会員の助言により当初予定していなかった防災かまどの設置へ至り、近隣住戸への対応についても対応範囲や、やり方について会員と協議し、多くの助言を得た。近隣住戸地域への事前の挨拶まわりには、ひろばくらぶ会員2名、プレーパーク当日の火起こしの準備から片付けまでは、会員6名が参加した。

上記のように2017年7月のA氏による提案から順調にプレーパークが立ち上がったようであるが、実はA氏は一年前の2016年7月に一度、高田小跡地公園検討会にてプレーパークの提案を行っていた。最初の提案時の参加者の反応は「特にない」という状況であった。高田小跡地公園検討会（以下公園検討会）はひろばくらぶと比較して参加住民が多く、特に長年雑司が谷に居住している高齢者の声が多い傾向があった。居住歴が浅いA氏は提案への反応に対し、それ以上強く押すことができず、また、当時仕事が多忙だったこともあり、検討会から足が遠ざかってしまった。しかし、一年後の2017年初夏に、公園検討会のコンサルタントから「プレーパークに反対している人はいませんよ」と連絡もらったことで、再度会議へ出席し、プレーパークの再提案に至った。会議体も、公園検討会からひろばくらぶ準備会へと移行しており、より新設公園の運用と

それを含み雑司が谷のまちづくりに関心があるメンバーが残り、発言しやすい雰囲気になっていた。ひろばくらぶはそれぞれの活動ごとにリーダーがおり、やりたい人が自発的に手を挙げて、リーダーとなって実行していく体制となっている。そして相談ごとがあれば会員が互いに助言しあったり、人手が足りなければ互いに手伝うという仕組みであり、新旧住民に関わらず何かをやりたい人を支援する関係性が構築されている。以上の経緯を経て、プレーパークはひろばくらぶの主活動の一つとなった。

5. 運営リーダーA氏について

5.1 プレーパーク提案の経緯

雑司が谷プレーパークはA氏の行動力、発信力が成功への要となっている。A氏がプレーパークを提案するに至った経緯について記す。A氏は現在保育園に通う子を持つ母親で、フルタイム勤務の女性である。雑司が谷在住は7年目になる。A氏がプレーパークを知ったのは、自身が子どもの保育園探しをしていた時であった。ある保育園で元冒険遊び場づくり協会理事の天野秀昭氏の講演を聴き、子どもに泥遊びをさせたいとプレーパークに興味を持った。しかし、プレーパークの遊び方を取り入れている保育園には入れず、そこで近所で開催しているプレーパークを探したが、どこも子どもが気軽に行くには遠く生活圏にはなかった。その頃に、高田小跡地に公園が新しく出来ることを町会の回覧で知り、公園検討会に参加するに至った。

プレーパークを再度提案するきっかけとなったのは、4.3に前述したようにコンサルタントからの連絡であるが、A氏は再提案するに向けて、たねの会主催のプレーリーダー研修を受講している。「あまり大きいことは考えずにやれることからやったらいい」「地域の方々の理解が大切。子どもの遊びだが、大人同士の関わりが大切」といったことを、この研修で学んだことから、「新参者の自分がプレーパークをやっていくには、住民の方々とうまくやっていくことが大切」であることを強く認識し、その後のひろばくらぶの会員を始め、地域住民との接し方への意識が変わった。また、プレーパークの理念がA氏の背中を後押しした部分もある。プレーパークを提案したものの、当初仕事をしていて時間もないので、行政やプレーパークにノウハウのある誰かにやってもらいたい、受け身に姿勢であった。しかしプレー

パークそのものが大切にしている「子どもがトライアンドエラーで様々なことに気づいていく」ことが、まさにプレーパークを始めようとしているA氏に必要なことだと自覚したことで、主体的に活動を推進するようになった。

5.2 プレーパーク運営を持続できた背景

雑司が谷プレーパークの実際の運営は、企画から運営までほぼA氏一人で行っており、ひろばくらぶ会員の支援やボランティアスタッフがいるものの、A氏の負荷が非常に高い状況である。それでもA氏がプレーパーク運営を持続できた理由は二つある。一つは、A氏がやりたいことは、単なる子どもの遊び場づくりだけでなく、大人を含めた皆が様々なしごらみやプレッシャーから解放される場をつくりたいことだと気づいたことにあった。「ダメだしされてばかりではやる気もなくなること、ましてやクリエイティブなことなど出来ない」と自身の経験で感じたことにより、それぞれの人がのびのびとすることで気持ちを切り替え、やる気がわいてくるような場をつくることの大切さを痛感し、老若男女を問わず、そのような場の必要性を考えるに至った。自分がやりたいことの本質はそのような場づくりだと実感し、その過程にいることに喜びを感じ、モチベーションを維持することが出来たといえよう。

もう一つは人との繋がり、支援があったことである。ほぼ毎回手伝いに来てくれる地域外から参加しているボランティアスタッフ三名の存在は大きい。特にP氏は、近隣小学校の学童保育や様々な子ども遊びのボランティア実績があり経験豊富な人物である。生き物との触れ合い体験のために虫やカエルを持ってきてプレーパークを盛り上げたり、遊び内容だけに留まらない様々な相談に乗ってくれており、A氏の支えとなっている。また、プレーパークの活動によって様々な人の繋がりが出来た。出張プレーパークを運営したWAKUWAKU代表の栗林知絵子氏主催の懇親会に参加したことにより、豊島区子ども課、プレーリーダー、前述したP氏といった人物と繋がり、彼らと交流することで、ノウハウを学んだり、プレーパーク実施への意欲を高めていった。

6. まとめ

雑司が谷プレーパークが一年強で地域に定着し、安定的運用に至った要因として、プレーパークのリ

ーダーであるA氏の活躍は言うまでもないが、それと共に、その活動を支援しているまちづくりNPOの存在意義は大きい。以下にまちづくりNPOの一活動としてのプレーパーク運営の特徴を考察する。

(1) 多様な人材のネットワーク

ひろばくらぶの会員は雑司が谷居住歴、ライフステージが多様である。その多様性がプレーパークの運営に良い効果を与えている。プレーパーク活動のコミュニケーションは、各会員のネットワークによって、保育園、小学校、商店街、町会等へと伝えられるが、多様な会員の多様なネットワークによって伝えられるため、情報伝達範囲が広く且つスピードがある。また、プレーパーク運営に対しても、多様な視点でチェックが可能である。火器使用における公園近隣住民への挨拶の必要性や挨拶方法について、多様な住民の立場で検討することで、問題を未然に防ぐことが可能である。特に、雑司が谷居住歴が長く、幅広く強固なネットワークを持つ高齢者会員の存在は、プレーパーク活動に対する地域住民の理解を得るのに強力なサポートとなっている。

(2) フラットな組織体制

ひろばくらぶの活動は3.1に前述したように多岐に渡る。形式としては、理事長、副理事長、理事、その他会員になっているが、実際にはフラットな組織で、会員が自発的に提案し、手を挙げた人がリーダー及びサポーターとなって活動している。役割を与えられるわけではないため、それぞれの活動に対するモチベーションが高い。日常はそれぞれが独立して活動しているが、何かあれば互いに手伝う関係性が構築されている。船頭は多いが、「地域のまちづくりとその活性化のため」という共通目標があるため、ひとつの組織としてまとまる事が出来ており、発言がしやすい雰囲気になっている。

(3) まちづくり専門家の参加

フラットな組織体制をまとめる役として、まちづくりコソサルトの存在は大きい。長年地域のまちづくりに関わっており、住民からの信頼も厚い人物である。第三者的な立場で冷静に状況を俯瞰して、A氏にプレーパークの再提案を促したり、A氏を副理事長へ推薦する、といった重要なところで支援を行っている。

様々な人との折衝やまとめに長けているまちづくり専門家の特徴が有用されたといえる。

(4) 多様性を前提としたインナーコミュニケーション

プレーパーク活動を進めていくためには地域の理解が大切である。ひろばくらぶには多様な住民が存在するため、会員の理解を得ることが、地域への理解に繋がりがやすいといえる。会員がプレーパークに協力的になったきっかけは、出張プレーパークに参加し、子どもが嬉しそうに遊ぶ姿を目の当たりにしていい活動だと実感したこと、そして気づいたら子どもだけでなく、自分たちも楽しんでいたことに気づいたことであった。A 氏も楽しんでいる会員をみて、受け入れてくれると自信を持った。その後も、A 氏による毎月のプレーパーク通信の配信や、手続き等の進捗状況の情報発信によって、会員はプレーパークに対して親近感を抱くようになった。多様な価値観を持っているからこそ、伝える努力をし続けたことで、共感、信頼を得ることが出来たといえよう。

(5) 公共空間利用の変化

冬場に防災かまどを使用したプレーパークを実施したが、A 氏は当初防災かまどの設置まで計画していなかった。しかしひろばくらぶの会合にて火器使用の相談をした際に、せっかくなら災害時に備えて防災かまどを利用したらどうかという助言があり、様々な検討を重ねた結果、プレーパーク会場となっている公園に防災かまどを新設し、防災かまど使用の訓練も同時に行うことが出来た。プレーパーク活動単体では、防災かまどの設置まで至らなかったであろう。実現へ向けての手続きは会員やコンサルタントの支援により、迅速に行うことができた。また、公園の危険箇所への対策についても、長時間大人の目があったからこそ気づき、更に個人では危険を感じていても対応しにくいのが、公園緑地課との関係性も構築されている活動団体であることから迅速に伝え、対応をお願いすることが可能であった。

以上のように、プレーパークを主活動とする団体ではなく、まちづくり NPO の一活動としてのプレーパークであったからこそ、その特徴が有用された点が複数みられた。また、この様に設立されたプレ

ーパークは単なる子どもの遊び場づくりの活動に留まらず、地域社会への貢献に繋がっていきやすいとも考えられる。一方で、課題も存在する。現在雑司が谷プレーパークの実質運営は A 氏と他地域からのボランティアスタッフのみで行われている。A 氏と同年代の「地域の仲間」が増えることで、A 氏の負担が軽減されることが期待されるものの、自発的に申し出てくるのを待っているがなかなか難しい状況である。その点は、子どもを遊ばせたい親の集まりと異なり、多様な住民の集まりであることの弱点といえる。2020 年 3 月末に高田小跡地に新設公園が開園され、公園指定管理団体を目指しているひろばくらぶは新たなステージを迎える。雑司が谷プレーパーク活動も新たな場を得ることにより、活動の質の向上、更に公共空間の利用へ良い影響を与え続けることが期待される。

謝辞

インタビューにご協力いただいた佐分希久子氏、小野加瑞輝氏に心より感謝申し上げます。

注

- 注1) 本稿ではプレーパークは冒険遊び場を包括する総称として使用する。
- 注2) 第 7 回冒険遊び場づくり活動団体実態調査(2016)の調査対象は 406 団体、<http://bouken-asobiba.org/know/index.html> (2019 年 10 月 20 日閲覧)
- 注3) 特定非営利法人 日本冒険遊び場づくり協会が目指す冒険遊び場づくりとして、「子どもの生活圏にあること」「いつでも遊べること」「だれでも遊べること」「自然素材豊かな野外環境であること」「つくりかえができる手づくりの要素があること」の五つを大切にしていると述べている、<http://bouken-asobiba.org/make/goal.html>
- 注4) Table 1 の運営主体の「冒険遊び場を主としない市民活動グループ」には NPO 法人が含まれていることは調査実施元に確認済み。「その他」に NPO 法人が記載されているが、明確に特定できなかった NPO 法人がここに含まれる。
- 注5) 雑司が谷ひろばくらぶのホームページ「団体紹介」より、<http://zoshigaya.club/about.html>

(2019年10月20日閲覧)

- 注6) 雑司が谷ひろばくらぶのホームページ「活動紹介」より, <http://zoshigaya.club/katudo.html>
(2019年10月20日閲覧)
- 注7) 雑司が谷プレーパークの紹介には「プレーパークにはプログラムがありません。禁止したり, やり方を無理強いしたりせず多少のケガやけんかは見守りながら子どもたちが自分で考えたことにとことん挑戦できる場所を目指しています。大人も「ダメ! アブナイ!」と注意ばかりの日常から解放されてのびのびとした気持ちで子供を見守りながらおしゃべりしたり, つながれたりする場になればと思っています。」と記載されている。
- 注8) 東京プレイデーは「すべての子どもが豊かに遊べる東京を, 東京で過ごす大人・子どもみんなで見守ることができるよう, 遊ぶ大切さを啓発するキャンペーン」であり, 毎年10月1日の都民の日に実施されている。
- 注9) NPO 法人雑司が谷ひろばくらぶの設立は2018年2月のため, 本段階では準備組織である。
- 注10) 子どもゆめ基金は独立行政法人 国立青少年教育振興機構による, 子どもの健全育成の手助けをする基金である。
- 注11) としま会議は, ジャンルや世代を越えて豊島区のさまざまなヒトやコトを紹介しながら, 参加者同士の交流を促す, サロン型イベントであり, 毎回5名のゲストスピーカーを招いている。としま会議実行委員会が主催し, 豊島区の「わたしらしく, 暮らせるまち。」推進室が運営をしている。
- 注12) アシスとしまは, 子どもとおおむね39歳までの若者とその家族を対象に, 引きこもりなど生きづらさを抱えている若者を支援する総合窓口である。

参考文献

- コミュニケーション, 日本女子大学紀要(家政), 64, 89-97, 2017.3
- 2) 梶木典子: 冒険遊び場づくり活動団体の活動実態とその経年変化 第6回 冒険遊び場づくり活動団体実態調査の結果より, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2014.9
- 3) 梶木典子: 冒険遊び場づくり活動団体の実態に関する研究: 第7回 冒険遊び場づくり活動団体実態調査の結果より, 一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集 69(0), 68, 2017
- 4) 神谷友子, 小松尚: プレーパークの立地・運営・空間と子どもの利用実態の関係に関する比較分析, 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 (2008), 799-800, 2008.7
- 5) 森賀文月, 瀬度章子, 田中智子: 関西圏のプレーパーク(冒険遊び場)における運営と利用実態について, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 2001
- 6) 梶木典子, 瀬渡章子, 田中智子: プレイリーダーが常駐する冒険遊び場の利用実態と評価 てんぱくプレーパーク(名古屋市天白区)における調査事例, 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 (2003), 671-672, 2003.7
- 7) 朴恵恩: 冒険遊び場における運営形態の実態からみた継続性と自立性に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, Vol.74 No. 640, 1379-1385, 2009.6
- 8) 梶木典子: 住民と行政のパートナーシップによる冒険遊び場づくりの運営実態 全国の自治体を対象とした調査結果より, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2005.9
- 9) 嶽山洋志, 中瀬勲: プレーパークにおける持続的な活動形態に関する研究: -有馬富士公園あそびの王国での一考察, 環境情報科学論文集 ceis22(0), 411-416, 2008
- 10) 濱本早織, 野沢康: 子どもの遊び場づくりとしてのプレーパーク事業に関する研究, 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 (2006), 563-564, 2006.7

- 1) 細野茜, 三浦茜, 葉袋奈美子: 雑司ヶ谷研究(8) 御会式大祭への子供の参加と近隣住民とのコ